

会員のひろば

題字：倉林 順一

◇中間選挙が無事に、なんとか左派が右派を上回る形で終わって、ほっとしているこのごろです。数日前にセドナに帰り、送っていた「育ちと学び」の最新号を受け取りました。いつもありがとございます。お便りも、嬉しく拝見しました。

和太鼓の青山さんのことは、船橋先生から少し伺った記憶がよみがえってきました。代行の仕事をしたが、太鼓を続けていて、次の夢はと問われて答えがみつからない姿に、飾らない人柄が想像されます。夢が描けないでいるともみえるし、いまという時間に足をつけて、任されていることに自分なりに応えようとされているともみえますね。

内藤先生の教育勅語の記事は、勉強になりました。もうすこし続きが読みたいです。吉井高校の狩野先生の授業は、「嘶家」のたとえがびつたりですね。こちらで『アクティブ』あるいは、生徒主導型とされる授業の形とは、かなり違うので面白いです。こちらの教員研修で見せられる、よい授業、よい先生のお手本は、先生が「親切」ではないです。よくこれで生徒がついてくるなあ、とびつくりするほど、ばあんと突き放して、しかも生徒は待つてましたとばかりにそこについて飛びついていき、グループ学習に入っていきます。それはかならず、都市部の、レベルの高い学校の例なので、あまり私たちの参考にはならないのですが。雑

談から入ってひきつける授業、私自身も覚えがありましたが、こちらではまったく見ないものひとつですね。この記事を読んで、はじめに、「そういえば違う！」と気がつきました。家に帰って家族に話したくなる授業、っていうねらいが、いいですね。人に話せるということとは、理解できたことなのよりの証拠ですものね。このあたりは、こちらの教師たちにも、共感できる部分のひとつだと思います。

可笑しかったのは、会員のひろばの金井先生のお便りでした。友と松茸を採って己と人間性を考える、私もなんとなくそんな心境です。きつかけは松茸ではありませんでしたが、日本の友たちとのグループラインは退会させてもらい、母に送ってもらったナバホや先住民の歴史の本を読んで、こちらの生活にもぐりこんでいます。瀧口先生がはさんでくださった紅葉の押し葉を、しおりにつかっていますよ。1860年代にナバホ族が白人の軍事力によって東への移動を強要された「ロング・ウォーク」のことも、やつとちゃんと勉強できているのですが、この過酷な歴史をめぐるナバホの人々の複雑な心情が、朴さんが書かれた「恨（ハン）」と通じるところがあるなど、興味深く思いました。

(アメリカ アリゾナ州・エイムズ唯子)

◇叔父の納骨

叔父が88歳で他界した。これで、私のことをヒデユキと呼び捨てにしてくれる身内がいなくなってしまう。これは寂しい。お盆が近づくと叔父は必ず電話をくれた。「お前んとこの墓地だけ草ぼうぼうだ。むしっておいた方がいいぞ」。この声が二度と聞けない。先

日、納骨に行った。墓の手前に軽トラックが停まっていた。中之条の石屋さんだった。えらく遠い所を頼んだものだなと思つた。読経が終わり、飯の骨壺から墓穴に納める壺にお骨を移す時、石屋さんは頭骨を薄いガラスを扱うようにそっと入れた。「親戚でもないのに随分いいねいな人だなあ。でも、これでは時間がかかりそうだ」と私は思った。坊さんも見かねたかのように、「あとはこつちへまけてしまえばいいから」と言い、石屋さんは素直に応じた。

墓地から席を移し、会食に臨んだ時のことである。叔父の長女が一枚の写真を披露した。「父だつて髪がふさふさだった頃があるって証拠写真です」。背広姿の若々しい叔父と、年下らしい白いセーターの若者が笑顔で写っていた。中之条の法務局にいた時のもので、若者は調査士だった。若い二人はすっかり意気投合していた。それから45年。叔父は司法書士となり、若者は石屋になつていった。仕事を頼んだのは今の墓石建立くらいで、その後は、たまに旅行に行くといった淡泊なつきあいだった。石屋さんは納骨の依頼で叔父の死を知り、アルバムの中一枚をもつてきてくれたのだ。その時の話によると、依頼の電話を受ける数日前、胸さわぎがしたという。二人の関係が分かり私は先程の墓地での光景に納得がいった。叔父との今生の別れをせめて心をこめてほしいという思いがああのだらう。叔父は仕事やつきあいのことは殆ど語らなかつたという。棺をおおいて事定まるという言葉がしきりに頭に浮かんだ。

(高崎市・金井秀行)